



Title	アスリート言説の言説空間：新たな<スポーツする主体>の登場 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	石井, 克
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 乙第7202号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92066">http://hdl.handle.net/2115/92066</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Ishii_Masaru_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：石 井 克

審査委員	主査	教授	西 村 龍 一
	副査	教授	瀧 元 誠 樹
	副査	准教授	冨 成 詢 子

## 学位論文題名

アスリート言説の言説空間：新たな〈スポーツする主体〉の登場

口頭審査は2024年1月19日16:30より307室にて1時間30分行われた。

最初に申請者から約30分、パワーポイントを使って博士論文の概要が説明され、その後、3人の審査員との質疑応答が約45分間行われた。

審査員の総評としては、近代のスポーツ史とその言葉の歴史を、とりわけイギリスにおける階級制度の反映としてのアマチュア／プロフェッショナルの差異化を核としての確に概観しつつ、それを現代日本の新聞言説における言説分析と組み合わせ、「アスリート」と表示される新たなスポーツする主体の登場を論じた点が、発想の独自性と現代性の点で高く評価された。自論を展開する前段階としてのアスリートに関する先行研究と自身の研究の差異化、その方法論としての種々の言説分析の提示と相互の連関も丁寧になされ、またKHcoderを用いた量的分析と質的分析との組み合わせも的確に行われていた。アスリート言説の特質をいくつかに分類し、それを分析するのに同じ新聞記事が反復して用いられるが、最後にはいくつかの主要な記事でそれらの特質が合流してひとつの言説空間を提示する構成は説得的であると高く評価された。この研究はスポーツ史学会でも先駆的で続く若手研究者に影響を与えていて、また本論で扱われていなかった分野、たとえば学校でのスポーツ教育においてもここでのアスリート分析は関連性があるとのコメントもあった。

質疑応答においては、まず言説空間の規則性はそれ自身としてはどのように記述されうるかという問いが出され、執筆者からは自身がアスリートであることを意識化することが主体化の前提であり、かつそうした主体化は社会貢献とセットになるといった大きな規則性はあるが、規則を単独で概念化することはできず、個々の記事で機能している力学において示すことになったという回答がなされた。結論部のスポーツにおける階級の消滅と再生産については、再生産はノマドワーカー化のような社会的現実におけるそれというよりは、むしろ「アスリート」は言説として不

可視の階級を再生産しているのではないか、そう考えたほうがメディアにおけるアスリートのロールモデル化をうまく説明できるのではないかという意見も出された。また「アスリート」が当初の陸上競技者から曖昧に拡大していくさまは、言説分析という本論の方法論とよくマッチしているのだが、時代背景が言葉にどう影響しているのかという問いには、公共性や多様性の時代的な理念は、たとえば障がい者スポーツでのアスリートの使用とはもちろん関連しているだろうが、その影響関係はいちがいに論じられず、個々に示して積み重ねるしかないだろうと回答された。また同じ「アスリート」の競技における用いられ方の違いが問われ、芸術系、特にストリート系のスポーツでは他と違う、あるいは個人競技と団体競技では差異が認められるという答えがあった。また時として若干分析が雑で、結論が先にあって分析をそれに当てはめているように見える箇所や、言説上の主体と社会現実上の主体が曖昧に思える箇所があったこともコメントされた。

以上の総評とコメント、質疑応答の後、執筆者と他の参加者に退室してもらい、3人の審査員で15分程度可否を協議した。博士論文の学術的水準は、最初の総評にあるような理由から十分に学位授与の水準を超えており、また質疑応答からは、執筆者は自身の論文の価値とその今後の課題とを客観的に認識していることが十分に確認された。よって審査員全員一致して合格とした。